

水俣病，ハンセン病に学ぶ

増田 一世

この秋、熊本に行った。きょうされん熊本大会に参加するためだ。そこで、胎児性水俣病の人とハンセン病の元患者の人の話を聞いた。水俣には「ほっとはうす」という作業所がある。「ほっとはうす」の仕事の1つが、水俣病事件を伝える活動「水俣から宝物を伝えるプログラム」だ。きょうされん大会の全体会のシンポジウムで金子雄二さんが、特別分科会で松永幸一郎さん、永本賢二さんが自身の体験と水俣病についての思いを語った。

本誌の前号の内山節さん（哲学者）がインタビューの中で水俣病のことに触れている。水俣病が認定され、補償で終わりではないこと、水俣の人たちは「ともに生きる水俣をつくり直すこと」を最終解決の方向性とし、チッソ（水銀を垂れ流した企業）の人たちも含めて、どう生きていくか患者のほうから語りかけていくことになったと語ってくれた。

水俣市はいわゆるチッソ城下町であり、企業とともにあった町だ。被害を受けた人たちの中にもチッソ関係者は多く、語り部の1人である永本さんのお父さんもチッソに勤務していたという。小学校の頃、文房具屋で鉛筆を買おうとすると、補償金で買うのかと言われとても嫌だったこと、補償金よりも身体を治してくれと思ったことなどを語ってくれた。

今年の水俣病認定60年。水俣病はその事実がわかってからも、チッソは事実を隠蔽し、それゆえに被害が広がった。人々のいのちや暮らし、美しかった海を奪ったチッソ。ここにも国を挙げての「人のいのちより経済成長」という強い意志が表れている。その反省は生きているのか。

ハンセン病の元患者のお話や熊本市にあるハンセン病の療養所である菊池恵楓園の見学からもこの国の姿とその中で闘ってきた人たちの歴史の重みを感じた。入所すると戸籍上の名ではなく療養所の園名を名乗る。広大な療養所の敷地の中に納骨堂があり、あらゆる宗派を祀った講堂がある。ここに一旦入所したら、死んでもなお故郷に戻れない人がいる。治療薬もあり、感染力も弱い病気でありながらも、優生保護法によるハンセン病の人への断種・墮胎、ここにも優性思想があった。根深い差別・偏見がいまなお払しょくされずにある。

水俣病のこと、ハンセン病のことからもっともっと学ばなくてはならない。まずこれらの事実を私たちは忘れてはならないし、風化させてはならないのだろうと思う。今号の特集でも登場している安永健太さん事件の遺族であるお父さんと弟さんも同じことを訴える。忘れないでほしいと……当事者に学び、社会を変える力にしていきたい。